

## エイミー ローウエル (Amy Lowell) とその詩

矢 島 敬 二

アメリカ大陸の発見は、同時にまた、精神的新世界の発見であったといえる。独立以後約二世紀を経て、一つの異質的な文化の成熟の一段階に達したアメリカの文化は、その文学史に於ても、その特質を見ることが出来る。

英語で書かれているという理由で、アメリカ文学は、英文学の一ブランチであると常に考えられ、その結果、アメリカ文学史にはアメリカの植民時代の特に英国的特質を多分に含む文学、及びその作家たち、例えば、Irving とか、Longfellow とか、Howells とかに重点が置かれていたものである。そして、Walt Whitman, Herman Melville, Mark Twain, Theodore Dreiser といった作家は、文化発展過程に於ける“crude”な段階にあるものと考えられていた時代があった。否、今でも、そういう考え方に立って、アメリカ文学史が書かれ、売られている場合があるのが、実情であろう。こうした傾向に対して、一つの開拓的仕事を成し遂げたのは、1927年に出た V. L. Parrington の“Main Currents in American Thought”といえる。尤も、この頃は、歴史家は、テーヌとか、ヘーゲルとか、マルクスとかいう人々に源を発する、いわゆる環境決定論的考え方が、一般に行なわれていたのであるが、Parrington は、これらの老人たちの思想を認めたのではなく、単にその方法を取入れたに過ぎない。即ち、文学的表現を端的に、且つ単純に、その表現せんとする生命と結びつけて考えようとするのである。

その結果、Melville とか、Thoreau などを再発見し、Whitman とか Mark Twain に対する同情を深め、アメリカ的とは何であるかを示し、その気質、地方色、民謡、伝説に対する世の関心を喚起し、それらを素材として忠実に表現しようとした作家や、その思想を再検討せしめる傾向が、生まれることとな

った。但し、素材に忠実なる余り、政治的、社会的の記録に価値があるかの如き作風が生じ、想像力の活動が狭められるという反動的な傾向も生じて来た。その極端な例は、マルクス主義の理論を認め、社会主義的現実主義ともいうべきドグマを以て臨むといった態度さえ現れた。皮肉にも、Poe とか Dickinson とか、Henry James とかいう大御所は、アメリカ的生活には超然として、我関せず的態度であり、一方、Melville, Mark Twain は新しい分野を開拓して行ったと見られる。

茲で、我々は、アメリカ文学を、どう見るべきであるかについて、1945年以来、ペンシルバニア大学の英語教授であり、ハーバート、コロンビア、ミシガンその他の諸大学に於て講じてきた Robert E. Spiller 教授のアメリカ文学に対する卓見を傾聴しなければならないであろう。(The Cycle of American Literature)

“Literature, therefore, has a relationship to social and intellectual history, not as documentation, but as symbolic illumination. …… The first task of the new American literary historian was to discover which were or are the major American authors, and not to be misled by the fact that some of them denied their country and became expatriates, others lashed out against it with satire or overt denunciation, or escaped from it into dreams and fantasies. These are merely varying forms of relationship between the writer and his materials”

「従って、文学は、社会及び理知の歴史に対し、記録としてでなく、象徴的啓示として関係をもつものである。……新しいアメリカ文学史家の最初の仕事は、誰がアメリカの大作家であったか、又現在あるかを発見することであった。そして、それら作家の中、或者は自国を拒否して国籍離脱者となり、或者は斯かる者に対し、諷刺を以て或は公然の非難を浴びせて、痛撃し、或者は、そういう事から逃避して、夢、空想の世界に入ってしまった。これらは、いずれ

も、作家と、その作家のもつ資料との間の関係の種々異った相をなしているに過ぎない。」

“The merely rationalistic view of history, which deals with logical sequences of cause and effect, is inadequate to deal with relationships such as these. If there is one idea that most major American authors have in common, it is the belief that life is organic; and the American literary historian can do no better than to adopt for his study an organic view of history. The individual organism follows the circular pattern of life; it has a beginning, a life cycle, and an end. This simple principle may be discovered in the structure of a poem, in the biography of an author, in the rise and fall of a local or particular cultural movement, or in the over-all evolution of a national literature. The historian's task is to discover the Cycle, or cycles, by which his literature is determined both in general scheme and in detail.”

「単なる合理主義的歴史観は、因果関係を論理的に扱うだけで、こうした関係を扱うには適切ではない。もし、大部分のアメリカの主だった作家たちが共通にもつ一つの考え方があるとすれば、それは、生命は有機的であるという信念である。従って、アメリカ文学史家としては、有機的歴史観をもって研究するのが最善である。個々の有機体は、生命の循環的性質をもつ、即ち、始めがあり、生命の周期を経て終末が来る。この単純な原理は、一つの詩の構成にも、一作家の一生にも、一地方の又は或る特種の文化活動の興亡にも、一国の文学の全展開過程にも見出されるであろう。歴史家の任務は、その研究対象とする文学を全体として、又部分として決定している一つのサイクル、又は複数のサイクルを発見することである。」

そして、Spiller 教授は、こう言う。

“American literature, when reviewed in terms of its major authors

and from the vantage point of the period of its greatest achievement, the twentieth century, reveals such a cyclic rhythm.”

「アメリカ文学は、その主要作家たちの場合から見た時、又その最盛期即ち20世紀から見た時、こうした周期的な一つのリズムを成していることを知る。」

そして、このアメリカ文学のリズムの基本的テーマを成すものは何であるか。Spiller 教授は、言う。

“the removal of a mature and sophisticated civilization—that of Western Europe—to a primitive continent ideally suited to its needs and virtually unexploited of its apparently infinite natural resources.”

「成熟し、世間ずれのした文明——即ち西欧文明——を、その要求に理想的に適合し、又その無限の自然資源が、全く未開発であるところの一つの原始的大陸に移動すること」

これが、アメリカ文学の基本テーマであり、中心的歴史的事実をなしているというのである。

そして、アメリカが西部へ拡大して行き、そこで新しく形成された文明が、その影響を、逆に、親元の文明に及ぼして、茲にアメリカ文化全体としての一つの周期を形成していった。文学史家は、文学を象徴的啓示として、このサイクルの遠大且つ微妙な型を解明して行く必要がある。このサイクルは、未だ完成してはいないのかも知れないが、しかも4世紀の間に、各種の波動を経て、確固たる定型を成している。

このサイクルについて、更に、Spiller 教授は、

“When applied to the story of American literature as a whole, this cyclic theory discloses not only a single organic movement, but at least two secondary cycles as well: the literary movement which developed from Eastern seaboard as a center, and culminated with the great romantic writers of the mid-twentieth century, and that

which grew out of the conquest of the continent and is now rounding its full cycle in the twentieth century”

「このサイクルの理論を一全体としてのアメリカ文学に適用してみると、それが一つの有機的運動であるばかりでなく、少くとも、二つの二次的サイクルを含んでいることが、判明する。即ち、東部を中心として発展して19世紀中葉のロマンチック派の作家たちを生んだ文学運動と、米大陸の征服から成長して、20世紀に今や、そのサイクルを完結せんとしている文学運動とである。」  
といている。

このサイクル理論は、個々の作品について考えてみても、一つの詩とか、劇とか、小説とかを、何らかのアメリカ的経験の源泉からの審美的距離について、測定すべき公式を提供してくれる。

アメリカ文学は、アメリカ発見者コロンブスの、かの有名な「書簡」から始まり、次に宗教とか哲学とかに関する論文が生まれ、次にヨーロッパ文芸の模倣作品が現れ、最後に、新しい生活の独創的、有機的表現が生れて来たのであって、この過程は文明が進むにつれて、絶えず繰り返されて行くサイクルなのである。

文学史家の仕事は、単に過去の経験を詳細に記述するに止まるのではなく、これを再組織し、それを貫ぬく意義を発見し、それを表現していくことであらねばならない。

さて、こうした見地から、アメリカに於ける、いわゆる “Poetic Renaissance” の意義と、その中心人物の一人、女流詩人エイミー ローウエル (Amy Lowell) とその作品について検討をしてみたいと思う。(未完)